

# 図書館だより

## 音楽を「読む」日々

図書館長 村田 和穂



現在、有明高専の英語教員である私は、大学は「文学部文学科（英語英文学コース）」を卒業したことになる。しかし、実際に所属し、卒業したのは「教育学部音楽科」ではなかったか、と思うことがある。今回はそのことについて書いてみたい。入学後の5月、もともとクラシック音楽が好きだったこともあり、思い切ってオーケストラ（以後「オケ」と略称する）に入部し、ヴァイオリンを始めた。当時、オケは教育学部音楽科に属していた（現在は違う）。そのため練習は教育学部の音楽棟で行われており、日曜祝日関係なくほぼ毎日そこに通うことになる。高校の時に興味を持った文学と英語を専門的に勉強したくて文学部の英文科に進んだのに、オケに入って、自分が本当にやりたかったのは音楽であることに気づいた。2年生の時に奨学金とアルバイト代を貯めて自分の楽器を購入すると、ますます音楽にのめり込む。年2回開催していた演奏会が近づくと授業は全て「自主休講」にし、朝から晩まで練習した。上手くなりたい、綺麗な音色を奏でたい、ただそれだけだった。当時の雰囲気としては宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』の主人公に似ていたかもしれない、というより私が意識してゴーシュ君を真似たのだ。音楽棟に入り浸るうちに、様々な学部のオケの友人ができ、音楽科の先生方とも親しくなる。また海外の著名な演奏家やオケが来日した際には県外でも仲間たちと喜び勇んで演奏を聴きに出かけた。その一方で、文学と英語は私にとって急速に魅力と輝きを失っていく。次第に英文研究室に足が向かなくなり、英文科の同級生や先生方と疎遠になった。授業にもほとんど出なくなり、当然のことながら留年する。

「図書館便り」の第6号に「一人になったら本を読む」ことを高1以来実践していると書いたが、文学部の学生だった頃が一番本を読まなかったかもしれない。なんという皮肉だろう。その代わりに、楽譜はよく読んだ。特に指揮者が使用する「スコア」（総譜）を読むのが面白く、しかも勉強になった。演奏する曲や好きな曲の「ポケットスコア」（新書サイズの縮刷版）を買い求め、レコード（LPのちにCD）を聴きながら、手で拍子を取りつつ「読む」のである。慣れてくると、ヴァイオリンが旋律を奏でている裏で、他の楽器たちがどのようにその旋律を支えてハーモニーを作っているかなど、楽曲の構造がだんだんと見えてきて、楽しくて仕方なかった。3年生で<sup>(注)</sup>パートリーダーになると、自分が弾けないと話にならないので、寸暇を惜しんで練習した。どんな楽器の練習にも言えることだが、大事なのは、メトロノームを使用し、最初は非常にゆっくりのテンポで、ヴィブラートや強弱といった「表情」を一切つけず、一つ一つの音符の長さを確認し、キチッと正確に弾くという姿勢である。それが出来るようになると少しずつテンポを上げていき、最終的には「イン・テンポ」（楽譜に書いてある速度）で弾けるようになる。一応、理屈ではそうだが、相手はクラシック音楽の巨匠たち（モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスなど）の音楽である。思うようにいかないことも多かった。とりわけ2年生の定期演奏会で取り上げたマーラーの「交響曲第5番」はまさに「生き地獄」だった。マーラー自身指揮者で一流オケの性能を知り尽くしているのに、技術的に困難を極める箇所が続出する。こちらは楽器を始めて2年も経たない「ひよっこ」である。上記のような練習をいくら重ねても、弾けない箇所は弾けないのだ。全5楽章で70分を超えるこの大曲が終わった直後、私の隣で弾いていたS君は涙を流した。感動ではなく、弾けなかったからだ（私は泣かなかったが演奏中の過度の緊張とストレスで1日で体重が4kg減り、翌日から数日寝込んだ）。このような悪戦苦闘を繰り返しつつ、同時に大きな喜びも味わいながら4年が過ぎた。ところが、学部5年目のある日、音楽を続けていてもこれを生業にするのは到底無理だと悟り、音楽に未練を残しながらも英語と文学へゆっくりと針路を変更していくことになる。当時、プロの演奏家になりたいという具体的な夢があったわけではない。ただ自覚していたのは、何か別の仕事をしながら余暇にヴァイオリンを弾いたり、市民オケに入って活動するのは私の「性（nature）」に全く合わない、ということだった。私なりに真剣だったのである。

「教育学部音楽科」時代に培った楽譜を正確に「読む」習慣が、その後の私の英語を読む姿勢に大きな影響を与えているのは間違いない。ところで、英語教育の分野で「速読」や「多読」を奨励する人は「分からない語があっても気にせず読み飛ばし大意がわかればよい」ことを声高に言う。もちろん、このような読み方も時には必要ではあるが、このスローガンが一人歩きするとおかしなことになる。ゆっくりとしたテンポで一語一句を丁寧に分析的に読む「精読」の基本があって初めて「速読」や「多読」は生きてくる。その意味でも「精読」の大切さこそ有明高専の学生には教えたい。

（注）当時、私の通った大学の文学部では2年に進級できれば、4年までは自動的に進級できるシステムになっていた。そのため私も4年目には4年生になれたが、その時点で未修得単位が果てしなく残っていた、ということ。



## 私のイチオシ



創造工学科人間・福祉工学系  
メカニクスコース 柳原 聖先生



“ AI (エーアイ? I? 愛?) は地球を救えるか? ”



基調講演で書籍を紹介するSteinbuch教授

## 『オリジン』 (ダン・ブラウン作)

私がイチオシするのはダン・ブラウン作の『オリジン』です。ダン・ブラウンは、ベストセラー小説『ダヴィンチ・コード』の作者でもあり、『オリジン』は『ダヴィンチ・コード』で登場したロバート・ラングドン博士が登場する一連のシリーズの最新作でもあります。

この本との出会いのきっかけは、2018年にイタリア共和国で開催されたヨーロッパ精密工学会の国際会議に出席させていただいたときにあります。

(ヨーロッパ精密工学会への出張については、今年度の有明高専紀要No.55にて渡航報告をしていますので、興味湧いたら見てね♡)

この会議の基調講演で、オランダのトップレベル大学であるアイントホーフェン工科大学のSteinbuch教授の講演がありました。会議は比較的ヨーロッパの学生が多く出席する会議ということもあり、教授の基調講演では「これからの学生諸君が読んでおいたほうがいい本」が紹介されていました。このときに紹介されたのがダン・ブラウン作『オリジン』とユヴァル・ノア・ハラリ著『ホモデウス』の2冊でした。どちらの本も鍵となるのは「AI (人工知能)」です。このうち『オリジン』ではAIがもたらす私たちの将来社会をSFサスペンスストーリーとして提示してくれます。大変読みやすい本であり、また日常を振り返れば多くの人々が何かと“google先生”よろしくWeb検索に頼っています。好むと好まざるとにかかわらず私たちの技術開発はこの物語の近未来像に確実に向かっている。そう思われるところに私がこの本をイチオシする理由があります。

さて、物語のあらすじですが、新進気鋭のコンピュータ科学者エモンド・カーシュ博士(思いっきり技術系)から宗教象徴学者ラングドン博士(まったくの文系)にプレゼンテーションイベントへの招待が届き、物語が幕を開けます。このイベントではカーシュ博士が発見した人類の起源とこれからを全世界にライブストリーミングで知らしめるというものでした。

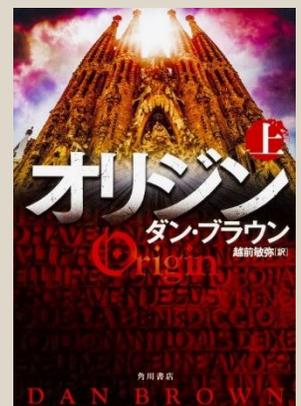
しかし、このプレゼンテーションの実施について世界の宗教指導者たちが大いなる懸念を表明します。カーシュが様々な宗教の神の出自を科学的に示してしまい、それぞれの宗教的価値観が崩壊させられてしまうことが懸念されたからです。

そしていよいよそのプレゼンテーション中に悲劇が起きます。カーシュ博士が何者かに暗殺されます。実はカーシュ博士は主人公ラングドン博士の教え子でもありました。一体犯人は誰なのか? 教え子が何を発見したのか? ラングドン博士の謎へのチャレンジが始まります。ここでラングドン博士をサポートするためにカーシュ博士の「相棒」が登場し大活躍をはじめます。

技術的な視点からこの物語を振り返ると、先にも述べたように鍵は「AI」です。WEBのオンラインサービスなどでも“お問い合わせ用チャットシステム”としてAIが人のようなふりフリをして大活躍しています。これまで優秀な人がこぞって就職を志望した銀行や医師、弁護士、教師などのコンサルティング業務や窓口業務は、今後の10年20年でAIチャットなどにとってかわられ劇的に減るのではないかとという予測もあります。私の専門であるメカニクスコース関連で想像すると、機械故障のトラブルシューティングなどにディープラーニングや機械学習というAI技術が爆発的に利用されてゆくことでしょう。

しかし、AIは基本的にはビッグデータ(膨大なデータ)の蓄積、つまりは“過去から私たちに気づきを与えてくれる技術です。このため「ひらめき」のようなインスピレーション(思考の飛躍)はAIでは困難であり、その「ひらめき」こそ人の創造性が発揮できる残された領域になるのではないかとされています。

将来のあなたはAIを使うほうになるのか? それとも使われるほうになるのか? ラングドン博士の冒険を通して考えてみるのはいかがでしょうか?



## 「専攻科生より本科生に薦める1冊の本」



### 『筋トレは最強のソリューションである』

テストステロン著



7C 上田 龍二

この本は著者であるテストステロンが効率よく鍛えられるトレーニングメニューを紹介してくれる本ではない。それどころかトレーニングに関する詳しい情報に関して一切載っていない。本書はどんな悩みに対して筋トレを主軸にすれば解決できるという「筋トレソリューション」について例を用いながら紹介していく本である。

さすがにいきなり「筋トレソリューション」とか訳のわからない言葉を言われても混乱してしまうと思う。そこで筋トレソリューションによる解決例を一つ紹介する。例えば、「自分に自信がない」といった問題があるとする。一般的な自己啓発本では「できない自分を許す」、「リラックスできる時間を持つ」などが良く見られるが、本書の解決法は「筋トレをする」だけである。これだけではさすがに納得できないと思うが、筋トレをすることで、体型の改善、ホルモン分泌によるメンタル向上、「上司も取引先もいざとなれば力づくで葬れる」と思うと得られる謎の全能感、など人体学的に詳しいことがユーモアを交えて1ページごとに説明してある。

また、本書は筋トレソリューションについて説明してあるが、実際に筋トレによって人生が変わった人の体験談をマンガエッセイ風に紹介している。実は著者であるテストステロンも筋トレで人生が変わった人物の一人である。内容については読んでのお楽しみであるが、現在は社長として世界を飛び回る筋トレエリートとなっている。本書を手取るのをまだ躊躇している人はテストステロンのTwitterも存在しているので、そちらでどんな人物が確かめてもらいたい。

学生生活を楽しんでいる人も、今が辛いと思う人も本書を知ってもらうことで人生の糧になる新しい世界(筋トレ)を開拓してほしいと思う。



### 『そして、バトンは渡された』

瀬尾まいこ著



7E 大木 保典

とても心が温かくなりました。読む進めるほどに心が温まるストーリーで、家族と親子の愛情のあり方を問う作品です。

家族とは形だけではない。転々と親が変わっていくような環境は不遇と思うかもしれない。決してそうではなく、しっかりとした愛情があれば、子どもは安心して育っていく。愛情があれば、この上ない幸せをつかむことができる。子どもは子どもで悩むことはあっても、愛情があれば克服できる。そう感じました。

食卓でごはんを囲むシーンがたくさんありましたが、どれも本当においしそうな情景が浮かびました。読後は、ほのぼののと、とても爽やかな気持ちになりました。

この本を読み終えて強く感じたことは、「家族とは」「親子とは」「血縁とは」はもちろんですが、とにかく登場人物の大人たちが素敵でした。子供へ明るく深く愛情を注げるステキな大人たちでした。子供と一緒に時間を楽しむ、大好きなものを作って一緒に食べる、子供がやりたいことを応援していく、こんな大人に自分もなりたいたいと思いました。

世の中の大人がこの登場人物のような大人達であつたら、世の中幸せな子供達がいっぱいになるだろうと思います。

子育ては素敵であるし、子育てはありがたいことだと感じられた作品でした。



## 『科学オタがマイ ナスイオンの部 署に異動しまし た』

朱野婦子著



7 M 椀 弘樹

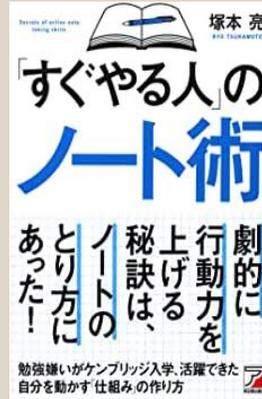
多くの情報があふれかえる中、日々情報の取捨選択を行っている。人々は藁をもつかむ思いで健康や美容、成功に関する情報を得ようとしている。非科学的だと分かっているながら信じる選択をすることは少なくない。

本書ではこの科学と非科学問題に切り込みながら、両方の視点を共存できる世界観を描いている。

立場や視点が異なる立場に立った両者が、互いを大事にするあまり、互いの考えを尊重できない。科学を信じる主人公と非科学を用いた商品の開発を迫る上司。互いの相対する信念がぶつかる中盤ではそれぞれの立場に寄り添い、相反する視点での考えが示される。読者は両者のどちらが正しいのかの判断が揺らぐだろう。そんな苦しい状況ののち、両方の

立場を理解した主人公は、信念を保ちながら相手の意見を取り込む新たな結果を出した。

両者が互いに寄り添っていき、異なる視点の立場の考えを理解する。考えが行き詰まったときに是非読んでいただきたい。



## 『すぐやる人のノ ート術』

塚本 亮著



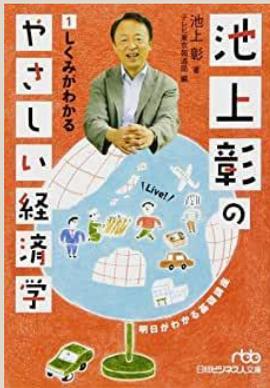
6 E 手嶋 諒治

私は、この本を読むまで全ての予定を後回しにする生活を送っていました。私は、とても面倒くさがりで、提出物もギリギリにならないとしないような人間です。スケジュール帳などつけた試しがなく、いつもその日に何かあるのかわからないまま生活を送っていて、その日になって焦るというのがルーティーンとなっていました。しかし、この本を読んでからというもの、毎日その日の予定を意識するようになり、携帯のカレンダーアプリを使って、予定が入るとすぐに書き出すようになりました。本当に面倒くさがりの自分が、カレンダーなどつける日が来ようとは今まで想像もしていませんでした。そのくらいこの一冊によって私の生活は変わったと言っても過言ではありません。

この本の内容を簡単に書くと、筆者も私のようにとても面倒くさがりな性格で、全てを先延ばしにするような人間です。相当な勉強嫌いで、偏差値も三十を下回り、クラスで一番太っていたそうです。しかし、筆者はこの本のタイトルでもある「すぐやる人のノート術」を実践することで、先延ばしサイクルから抜け出し、偏差値三十を下回っていたが同志社大学に現役合格、その後はなんとあのケンブリッジ大学大学院へと進まれています。そのような方が実際に試された「すぐやる人のノート術」がこの本には綴られています。

私は本を最後まで読みきったことが今まで一度もありませんでしたが、この本だけは唯一最後まで読みきることができました。そのくらいとても興味深い本となっています。自分も「先延ばしにするタイプの人間だ」と思い当たることがある人にぜひ読んでほしい一冊となっています。興味を持った方、ぜひ読んでみてください。





## 『池上彰のやさしい経済学』

池上 彰著



6 I 那須 新悟

経済学と聞くと、文系の分野なので、理系が得意な高専の方にとってはとっつきにくい学問だと思われる方も多いと思います。また、気にはなるけど難しそうだからどこから手を付ければいいのかかわからない、という方もいらっしゃるのではないのでしょうか？そのような方にお勧めの本がこの「池上彰の優しい経済学」です。

この本は、経済を専門としていない大学で、実際に池上さん自身が講義をされた内容を軸に書かれています。まるで経済を専門にしている学生のために書かれた本のように、高専のみなさんにとってかなりとっつきやすいと思います。この書籍は二冊の本から構成されており、一冊目では「しくみがわかる」、二冊目では「ニュースが分かる」というサブタイトルがつけられています。一冊目では、主に経済学の歴史と、その時代の考えが現代社会のどういったところで今でも使われているのか、という点に着目を置いて経済学を全く知らない人でも理解できるように工夫して書かれています。二冊目では、私たちがよくニュースで聞く言葉で知っているけれどどういう意味なのか、また、どうしてそうなったのか、よく考えてみると分からないことを解説しています、例えば、インフレとデフレについてや、なぜバブルが生まれ、はじけてしまったのかなど、言われてみればよく分からないことってありますよね。また、それと同時に気になってきませんか？そのようなモヤモヤを、この本は一つずつ丁寧に解説してくれます。

経済について興味がある方、経済学の入門書として一冊手に取ってみてはいかがでしょうか？



## 『幼年期の終わり』

アーサー・C・クラーク著



6 A 稲葉 淑貴

私は基本的に、本を読まない。勉強をしない。運動をしない。野菜を食べない。たまにやったり食べたりすれば、ああ今日の自分はよくやったなあとぐっすり眠って、得た知識もストーリーも健康も時が経つうちに綺麗さっぱりなくなるものである。さっぱりとしていて心地がよい。そういうものである。そうでないという者はもうこんな文に目を止めることは無いので帰ってよい。無限に時間の無駄である。

ここは本を紹介する場であるが、こんなもので君たちは読む気になるのか。なるものか、なってるものか、むしろこんなもので読む気になってやるものかと斜に構えて読んでいるその諸君の声も私にはわかっているぞ。そうでない者はエライ。エライ人には何も言うことがない。褒めて称えるよりほかにすることがない。すごいですね、どんな本を普段読まれるんですか？へー、サピエンス前史？面白そうですね（読まない）。ステイブンキング？はえーすっごいっすねえ。それハチャメチャに面白そうですね！僕もSF好きなんですよ、え？いや、特に好きな本とかは、げへ、すいません。屑みたいな人間ですいません。地球のダニ、宇宙の塵カスです。と、知識に乏しく本に疎いとこんなものである。

図書室には多くの本があり、その多くは埃を被って眠っている。インターネットが発達しすぎてしまっ、WEBにあったはずのきちんとした情報は大量のアフィリエイトサイトやどうでもいいツイッターのリンクばかりが出てくる。一体なぜこうなっているのか？ネットとは何なのか？真実の愛とは何か？調べてみました！調べてみた結果……よくわかりませんでした！でも、あなたの隣にいる人を守りたいと思う気持ちは、誰に止められるものでもないのかもしれないですね！

高次元な存在達は、あらゆる情報から価値を取り出そうとを惜しまない。「幼年期の終わり」の宇宙人たちもそうだった。地球人たちは、呑気で楽観的だ。それで、自分たちの文明の力のなさに気が付かない。そうして、知らないうちにこの人類の時代の結末を知るのである。





## 『君に恋をするなんて、ありえないはずだった』

筏田 かつら 著

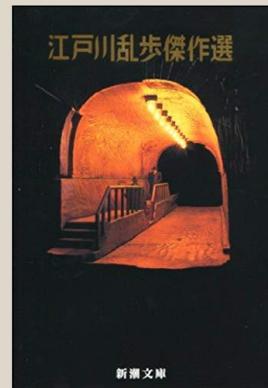


6 A 崎田 森平

私がおすすめる本は「君に恋をするなんて、ありえないはずだった」という筏田かつら著の小説です。この本は高専生には馴染みのない高校生活とセンター試験、そして、恋のお話です。2冊で一つの話となっており、どちらとも約300ページと読みやすい分量となっています。

登場人物は主に二人の男女とその友人たちです。物語は主人公(男)がヒロインを嫌いになるところから始まり、あることをきっかけに仲が深まっていくベタな展開ではあるのですが、学生特有のグループ間での立ち回りや、高校三年生でセンター試験間近、大学への進学、とさまざまな要素が積み重なって二人の関係を複雑にしていきます。この二人はどうなっていくんだろうと、ハラハラせずには読めない一冊となっています。

高専ではすることのなかった、センター試験や大学入試、そして恋をこの本で感じてみてはいかがでしょうか。



## 『人間椅子』

江戸川乱歩 著



6 I 三津家 健太

私がこの本を手にとったのは、去年の秋頃だったでしょうか。文庫本が並ぶ本棚の中にひときは目立つ真っ黒な背表紙で、一度は見たことのあるタイトルと作者名に私は興味を抱いたのでした。

さて、この本のタイトルは「人間椅子」と言いまして、若干の気味悪さを感じさせるのですが、この一冊の中に八つのさまざまな種類の短編小説が収録されており、その一つとなっております。せっかくだから、この人間椅子の概要でもお話ししましょう。

このお話は、とある若く美しい夫人の住む立派なお屋敷が舞台となっております。この夫人は作家をしておりまして、今日も今日とて書斎の机の前に坐り、未知の崇拜者達からの手紙を読まれるのでございます。

手紙が届くことは、これまでもよくあったことですが、「奥様」と、呼びかけから始まる手紙らしきものは、夫人の好奇心を刺激していくのです。それは、世にも醜い容顔をした男の、今までに犯してきた、世にも不思議な罪悪を告白するお話でした。

もっと話の内容をあげたり、他の作品のことも取り上げたいところですが、ここまでにして私のこの作品集の好きのところでもあげましょう。簡単にいうならば、皆さん面白い人間でいらっしやると感じるところであると思います。なぜ、自分の罪悪を長々語るのでしょうか。なぜ、自分が悪い事を知りながら生きていけるのでしょうか。なぜ、自殺してしまうのでしょうか。なぜ、このような話を聞かされているのでしょうか。人間のいろいろな部分を知ることが望まれる方なら、この短編集をおすすめさせて頂こうと思います。

それでは私も次の江戸川乱歩の作品集に手をつけようかと思うのです。お気に入りの椅子に座り、おっと、今日はよく沈み込みますねと感じました。



## 「第2回ブックハンティング」を開催しました。

「ブックハンティング」とは、図書館に置きたい本を書店に行ってもらって、学生自身に直接選んでもらうイベントです。第2回は、12月21日（土）、JR博多シティ8階の丸善博多店において、8名の学生に参加してもらい、幅広いジャンルの中から、後頁のとおり67冊の本を選んでもらいました。

来年度も開催予定ですので、ぜひぜひ、参加してみてください。



ディスプレイ（特設コーナー）



書店前

《今回参加してくれました学生8名の選書の一部を紹介します。》

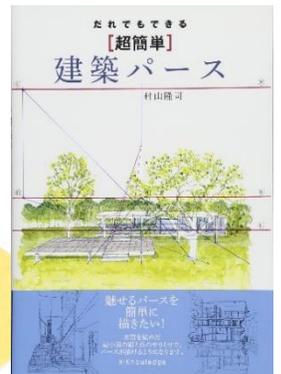
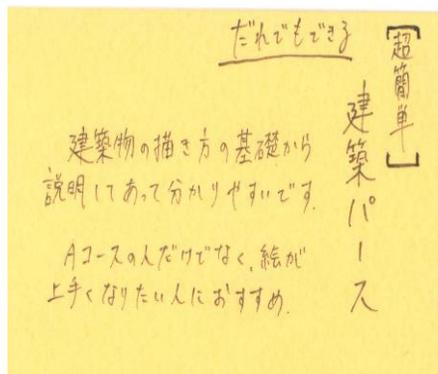
本人のハンドメイドのPOPを添えて、図書館特設コーナーに展示していますので、ぜひ、ブックハンター達の“本気の一冊”をご覧ください！



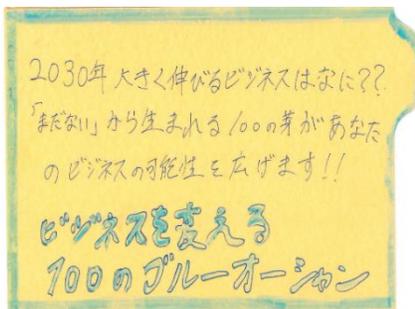
恋のゴンドラ 東野圭吾

合コンで知り合った2人の男女がスノボ旅行へ行くことになったが、男にとては最悪の旅行になる。衝撃のラストが見どころです。

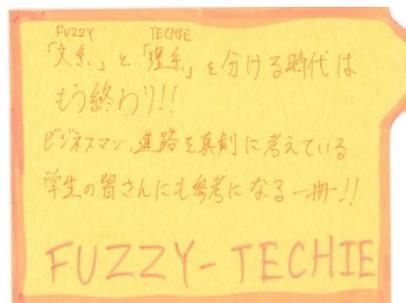
創造工学科3年  
野口 優香さん



創造工学科3年  
寺本 健太郎さん

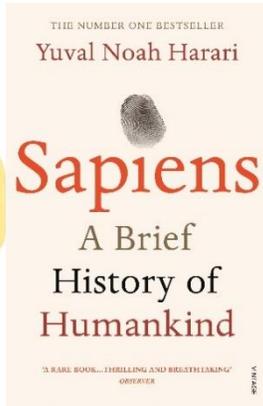


創造工学科4年  
堤 研太さん





「Sapiens」  
人間の歴史は面白い、人間は石を使う時代から現代までの進化を細かき説明される。  
一百万冊 コピーが売反売された  
母が言ってるみてえ



創造工学科 4年  
ジョンソンさん

これから活躍する人材要件  
ニュータイプとは?  
★オーロドタイプ ★ニュータイプ★  
正解を探す > 問題を探す  
予測する > 本義想する  
KPIで管理する > 意味を与える  
生産性を上げる > 枠を越え出す  
ルールに従う > 自らの道徳観に従う  
一つの枠組みに留まる > 枠組みを越境する  
得意に自信を演出する > とりあらず試す  
奪い、独占する > 奪え、共有する  
経験に頼る > 学習能力に頼る



創造工学科 4年  
谷 翔太さん



3時間の睡眠で8時間分のリフレッシュができる  
ハイパフォーマンス睡眠  
人生の1/3の時間は睡眠だと言われています。  
これを読んで人生をより良いものにしましょう!



創造工学科 4年  
松永 貴士さん

レバレッジ・リーディング  
「本を読む時間が無いのではなく、本を読まないから時間が無いのです。」  
ビジネス書・実用書の知識をすばやく効率的に自分のものにするテクニックを教えます。  
様々な本を読み進める前に、まずは読んでおきたい一冊です。



「ロウソクの科学」  
『科学を学ぶ上でロウソクほど良いテーマもない』  
ノーベル賞授賞者、吉野彰博士のルーツとも言える一冊!  
高専生ならぜひ一度手に取ってみては?



電子情報工学科 5年  
椎葉 千里さん



満願  
表題作の「満願」では、時代背景に合った言い回しや表現はとて良かった。又人も殺めた女が控訴を取り下げた理由、成就した「満願」とは。  
史上初めて三冠も達成したミステリー短編集の金字塔、山本福五郎賞受賞(裏表紙の技料)

電子情報工学科 5年  
平野 晃士さん





## ブックハンティング選書一覧

書籍名	著者	書籍名	著者
1 ユーフラテスブック 研究から表現へ	ユーフラテス	36 ビジネスを変える100のブルーオーシャン	日経BP総研
2 ミルク世紀～ミルクによるミルクのためのミルクの本～	寄藤文平	37 FUZZY-TECHIE～イノベーションを生み出す最強タッグ～	スコット・ハートリー
3 サピエンス全史～文明の構造と人類の幸福～〈上〉	ユヴァル・ノア・ハラリ	38 文系のためのデータサイエンスがわかる本	高橋 威知郎
4 サピエンス全史～文明の構造と人類の幸福～〈下〉	ユヴァル・ノア・ハラリ	39 直感力を高める数学脳のつくりかた	バーバラ・オークリー
5 虹いろ図書館のへびおとこ(5分シリーズ+)	櫻井 とりお	40 the four GAFA～四騎士が創り変えた世界～	スコット・ギャロウェイ
6 三体	劉 慈欣	41 SDGs入門(日経文庫 1408)	村上 芽
7 麦本三步の好きなもの	住野 よる	42 世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?	山口 周
8 ロウソクの科学 改版	ファラデー	43 ニューヨーク大学人気講義HAPPINESS	スコット・ギャロウェイ
9 宇宙の声 改版	星 新一	44 マインドフルネスの教科書～この1冊ですべてがわかる!～	藤井 英雄
10 戦場のコックたち	深緑 野分	45 60分でわかる! SDGs 超入門	バウンド
11 満願	米澤 穂信	レバレッジ・リーディング 46 ～100倍の利益を稼ぎ出すビジネス書「多読」のすすめ～	本田 直之
12 漂流街	馳 星周	47 私、息してる?	てんちむ
13 初級ロシア語文法	黒田 龍之助	48 量子コンピュータが変える未来	寺部 雅能
14 Linuxシステム<実践>入門 (Software Design plusシリーズ)	沓名 亮典	49 大学4年間のデータサイエンスが10時間でざっと学べる	久野 遼平
15 だれでもできる<超簡単>建築パース	村山 隆司	50 3時間の睡眠で8時間分のリフレッシュができるハイパフォーマンス睡眠	山口 真由子
16 目を見て話せない	似鳥 鶏	51 スノーデン独白～消せない記録～	エドワード・スノーデン
17 この世界で、君と二度目の恋をする	望月 くらげ	52 考える技術・書く技術～問題解決力を伸ばすピラミッド原則～	バーバラ・ミント
18 medium～霊媒探偵城塚翡翠～	相沢 沙呼	53 アフターデジタル～オフラインのない時代に生き残る～	藤井 保文
19 日本建築思想史	磯崎 新	54 図解でわかる!理工系のためのよい文章の書き方～論文・レポートを自力で書けるようになる方法～	福地 健太郎
20 20代で身につけたいプロ建築家になる勉強法	山梨 知彦	55 入門考える技術・書く技術～日本人のロジカルシンキング実践法～	山崎 康司
21 ル・コルビュジエ読本	二川 由夫	56 ニュータイプの時代～新時代を生き抜く24の思考・行動様式～	山口 周
22 屍人荘の殺人	今村 昌弘	57 武器になる哲学～人生を生き抜くための哲学・思想のキーコンセプト50～	山口 周
23 魔眼の匣の殺人	今村 昌弘	58 草の葉～詩集～	W.ホイットマン
24 絵で見てわかる伝統建築の図鑑	斉藤 武行	59 生き方～人間として一番大切なこと～	稲盛 和夫
25 竜になれ、馬になれ	尾崎 英子	60 こども六法	山崎 聡一郎
26 恋のゴンドラ	東野 圭吾	61 危機と人類〈上〉	ジャレド・ダイヤモンド
27 消えてください	葦舟 ナツ	62 危機と人類〈下〉	ジャレド・ダイヤモンド
28 この声が、きみに届くなら	菊川 あすか	63 21 Lessons～21世紀の人類のための21の思考～	ユヴァル・ノア・ハラリ
29 ケーキ王子の名推理(スペシャリテ)	七月 隆文	64 九州の南朝	太郎良 盛幸
30 Magpie Murders	Horowitz, Anthony	65 三池炭鉱遺産～万田坑と宮原坑～	高木 尚雄
31 Sapiens～A Brief History of Humankind	Harari, Yuval Noah	66 マンガでわかる線形代数	高橋 信
32 Everything You Need to Ace World History in One Big Fat Notebook	Workman Publishing	67 私費外国人留学生のための大学入学案内<2020年度版>	公益財団法人 アジア学生文化協会
33 ES細胞の最前線	クリストファー・T. スコット		
34 トコトンやさしいゲノム編集の本	宮岡 佑一郎		
35 スバラシク実力がつくと評判の微分積分キャンパス・ゼミ～大学の数学がこんなに分かる!単位なんて楽に取れる!	馬場 敬之		

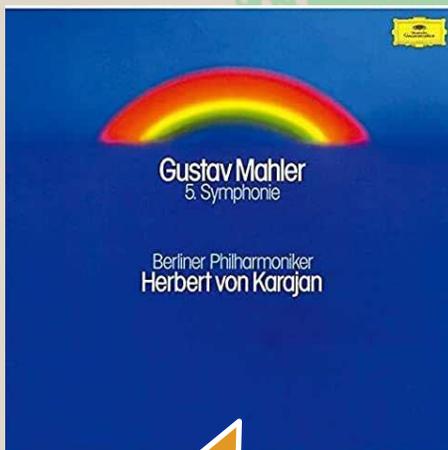
## 〈新着図書案内〉

### クラシック音楽の「スコア」を読んでみませんか？

世間には、音楽は好きだけどクラシックは苦手という人たちがいますね。確かに、曲によってはとても長いし、2～3回聴いたくらいじゃ「ワケがわからない」といった取っ付きにくい曲もありますよ。でもその長さやワケのわからなさが逆に良いのです。（時には辛抱しながら）繰り返し聴き込んでいくうちに、じわじわとその良さが身体に沁みこみ、心に滋養を与えてくれます。今回、ポケットスコアを約20作品図書館に入れました。全て名曲ですが、紙面の関係で数点だけ紹介しましょう。モーツァルトやベートーヴェンの「天才」を理解したいなら伝記や評伝を読むより、彼らの楽譜を読むほうがもっと直接的で实际的です。楽譜にこそ天才の痕跡がしっかりと刻みこまれています。ギターが弾けたり、ドラムを叩けるなら、一度スコアを読むことをお勧めします。まずは、モーツァルトなら「交響曲第41番〈ジュピター〉」の4楽章を、ベートーヴェンなら「交響曲第5番」の1楽章、または「弦楽四重奏曲第7番〈ラズモフスキー1番〉」の2楽章を、スコアを見ながら音源を聴いてみませんか？「うわー、すごい！」とスリリングな体験ができること請け合いです。

巻頭言で紹介したマーラーの「交響曲第5番」は特に吹奏楽部の部員の皆さんにお勧めします。まず金管楽器のソロが格好いい（特に1楽章冒頭のトランペットと3楽章のホルン、君たちに吹けるかな？）。でも弦楽器は本当にタフだ。4楽章は、映画『ベニスに死す』で有名になった「アダージェット」という弦楽器とハーブだけによる約10分の「間奏曲」で、金管と木管の奏者はまるまる休みになる。聴いているぶんには最高に美しい「癒しの音楽」なのに、弦楽器奏者は甘美な旋律をppp（ピアノシモ）からff（フォルテシモ）までの繊細かつダイナミックな表情を作り出すことで神経がすり減らされ、肉体的にも消耗する。しかも終わったら休みなく最終楽章に突入。ここでは弦楽器のそれぞれのパート（第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）および木管楽器群は交互に「追いかけて」をするような8分音符の忙しい動きを持つ「フーガ」となる（体力もメンタルもヘトヘトなところで何という責め苦！）。極めつけは、曲のクライマックスで、金管楽器が総勢で人間賛歌のようなコーラル（讚美歌風旋律）を高らかに奏する中、弦楽器はそれを支え、しかも音量的にも対抗する効果音のような音符をffで弾かなければならない。音楽は最高に感動的なのに、最後の最後で（アマチュアの）ヴァイオリン奏者は敗北感を味わうことになる（涙）。ヴァイオリンのパートに注目して聴いてみてください。

（図書館長 村田）



イチオシCD  
カラヤン指揮/  
ベルリンフィル  
4・5楽章の  
合奏力は圧巻!



# 有明高専美術ギャラリー2020作品紹介

昨年の11月16日に作品の入れ替えを行いました。ここでは作品の一部を紹介します。(敬称略)  
他にも素晴らしい作品を多数展示(図書館棟1階)していますので、ぜひ、間近でご鑑賞ください。

## 絵画



『新緑の鍋ヶ滝』  
藤吉 美保子



『落椿』  
上村 恵子



『水辺の花』  
桑野 禎子



『サン・マルコ寺院』  
岩本 久子



『動物園の秋』  
塚本 和美



『仮面行列』  
石井 保



『阿蘇(中岳火口壁)』  
奥苑 和司



『春が来た』  
木村 和子



『朝陽阿蘇』  
加治屋 陞



『コスモス』  
河島 房子

## 写真



『炎の舞』  
田中 浩久



『記憶の中へ』  
藤崎 聖二



『家路』  
渡邊 精之

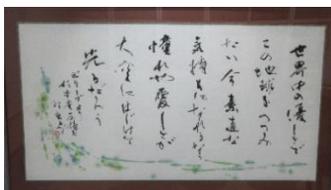


『よさこい』  
高口 博文

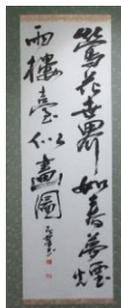


『放水の時』  
ふるいけ 博文

## 書



『ビリーブ』  
松尾 理恵子



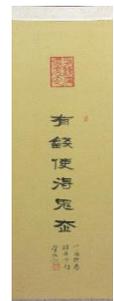
『張詩七言律詩』  
堤 春翠



『深遠』  
川井 遥水



『遠』  
奥蘭 千万喜



『有錢使得鬼走』  
中本 管城

## 〈新着DVD紹介〉

### 『アマデウス』 (1984年 ミロス・フォアマン監督 158分)

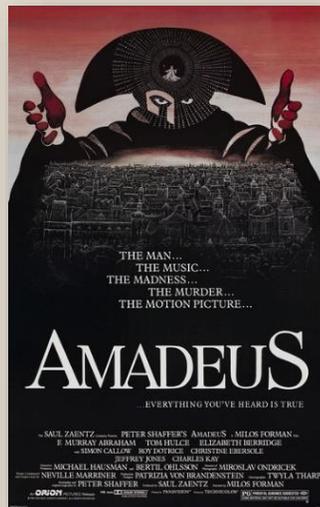
音楽をテーマにあるいは音楽家を主人公にした映画はこれまで数多く制作されたが、私にはモーツァルトの生涯を一風変わった視点で描いた『アマデウス』が最も印象深い。冒頭、「モーツァルトを殺したのは私だ」という謎の言葉を残し、かつてのライバルで今や年老いた元宮廷作曲家サリエリが自殺を図る。翌朝、一命をとりとめた彼の元を訪れた牧師にサリエリが「語り」始めることで、生前のモーツァルトが回想的に（しかし映画だからリアルに）描かれていく。

見所はたくさんあるが、一つに絞るなら、音楽の使い方を挙げたい。この映画にはモーツァルトの名曲が惜しげもなくBGM（背景音楽）として使用されているが、普通の映画のBGMとは一味も二味も違う。ここで流れる音楽の多くは「背景」としてではなく、モーツァルトの頭の中で今鳴り響いている音楽として表現されている。すなわち、この映画は見る者をモーツァルトの作曲現場に立ち合わせる「仕掛け」になっているのだ。仕掛けはこれだけではない。ライバルのサリエリの頭の中でもモーツァルトの音楽が鳴り響く（のを見ている私たちも共有する）。ここが映画『アマデウス』の最もユニークな点だ。サリエリはモーツァルトの天才に激しく嫉妬するが、同時に彼の音楽の最大の理解者でもある。第三者であるサリエリの頭の中でモーツァルトの音楽が実に美しく再現されることで、私たちはモーツァルトの天才を肌で感じることができ感動する。映画の終盤で、病床のモーツァルトをサリエリが協力する形で「レクイエム（死者のためのミサ曲）」の作曲過程が描かれる（実際にモーツァルトはこの曲を完成させることなく死去した）。ここで二人の頭に鳴り響く音楽はピタッとシンクロし、壮絶だが実に感動的な場面を生み出している。今の説明で、ピンとこない人は是非映画を見てください。「ああ、なるほど！」と膝を打つこと間違いなし。

(図書館長 村田)



「レクイエム」作曲中の  
モーツァルトと彼を手伝う  
サリエリ



ビリヤード台でボールを転がしながら曲を書くモーツァルト

### 編集後記

今回の「巻頭言」は思うところがあって音楽に熱中していた頃について書いてみたのですが、当時の思い出が溢れ出て1ページにまとめるのに苦労しました。その余韻もあってコラムを2つ追加しました。少々「マニャック」な内容をお許しください。今は完全に音楽活動から身を引きましたが、本校吹奏楽部の顧問なので施設への訪問等いろいろな場所で吹奏楽の「生演奏」を聴けるのは大きな喜びです。その意味で、今回の拙文を親愛なる吹奏楽部の部員たち（現役および卒業生）に捧げます。次に、初めての試みになるのですが、夜間アルバイトとして図書館の運営を支えてくれる専攻科の学生の皆さんに「本科生に勧める1冊の本」を紹介してもらいました。実験や研究で多忙な日々を送っている中、執筆してくれた紹介文は「さすがは専攻科生」と唸らせる力作揃いです。また今回の「イチオシ」執筆は柳原聖先生。何冊も紹介したい本があったようですが、「一冊に絞っては？」という編集長（私）の提案を意外にも（？）素直に受け入れ、タイムリーなテーマにメスを入れた紹介文を書いてくれました。最後に図書係の原賀係長と新里（ひ）さんは面倒な編集作業ご苦労様でした。皆様方、本当にお世話になりました。感謝です。

(図書館長 村田)